



スラムにおける遊び

東京大学 工学系研究科 建築学専攻
助教 井本 佐保里

1. 本研究の背景と目的

本研究は、ケニア共和国の首都ナイロビに位置するムクルスラム (図1、図2) を対象とし、同スラム内における子どものあそび環境に着目する。ナイロビ市内には100を超えるスラムが立地しており、ナイロビ市内の人口の60%がスラムに居住しているといわれる。

ムクルスラム内の児童の基礎教育を担っているのは、ノンフォーマルスクールとよばれる学校で、これは教育省より認可を受けたフォーマルスクールとは異なり、多くは自助グループとして社会開発省より認可された団体である。そのため、学校の空間整備に関する設置基準などは課せられず、校長の判断により教育環境が独自に整備されている状況にある。

本研究では、一般に校庭が整備され、敷地内で休憩時間を過ごし、遊びが行われるフォーマルスクールとは異なる教育環境が用意されているノンフォーマルスクールにおける遊びを含めた休憩時の児童の過ごし方に着目し、その特性を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

2-1. 調査対象地の概要

調査対象とするムクルスラムは、1980年代以降形成されてきたスラムで、ナイロビ市内では3番目の面積規模を持つ。スラム内では一般にインフラ整備が十分に行き届いておらず、電気、上水、下水に関しても正規のサービスを補う形でスラム独自の違法な整備が行われている。

2-2. 調査手法

これまでの研究で対象とした同スラム内の27校のノンフォーマルスクールのうち、学校が独自に校庭やトイレを持たず、近隣の機能で代替しているBET小学校を対象とする。調査では、同小学校の近隣街区の状況(店舗の種類、路地の形状など)を記録した上で、児童の休憩時の行為をプロットした。また、遊び場となっている路地に面した店舗の店主20名に対して休憩時の児童との接触の状況等についてインタビューを行った。

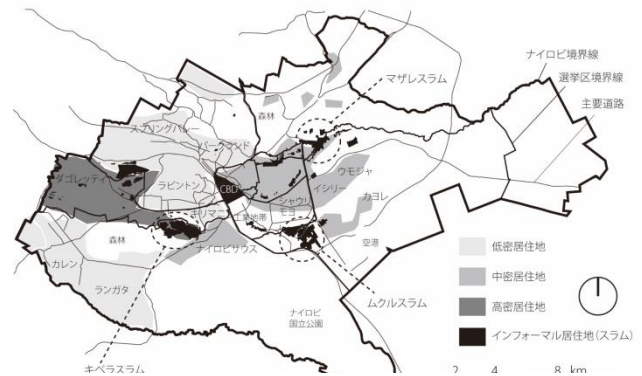


図1 ナイロビ市内スラムの分布

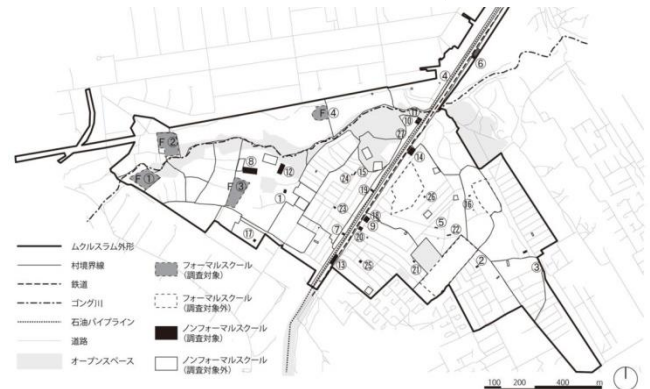


図2 ムクルスラム地図

3. 調査結果

3-1. BET小学校の近隣環境

BET小学校に隣接して住宅の長屋が立ち並んでいる。教室は細い路地に面しており、また、路地の中央や脇には下水溝が通っている。路地に面して複数の店舗が立地しており、確認することのできた店舗の種類を図3に示している。また図3の店舗②で示す貸しトイレを学校全体で利用している状況にある。

3-2. 休憩時の児童の行為

休憩時の児童の近隣における行為を観察した。その結果、近隣において「滞留する行為」と、「移動のための行為」に大きく分類することができた。移動のための行為とは、トイレや、食事を買いに行くために移動しているものを指す。一方、本研究では、特に滞留に着目した。

観察調査の結果、近隣の中で図3に示す8箇所で特に

児童が滞留していることが確認された。

滞留A 露店の商品（果物）を見たり触ったりしながら露店周辺に滞留している。

滞留B 路地においてあるリヤカーを遊具にし、ぶら下がったりしながら遊ぶ。

滞留C 火事の焼失したオープンスペースで物を投げたり、集まって遊ぶ。

滞留D 食堂の中に入って物品を購入する。

滞留E 店先に座り、店主や店主の赤ちゃんと交流する。

滞留F 貸トイレ前の路地においてあるリヤカーを遊具にし、ぶら下がったりしながら遊ぶ。

滞留G 路地に面した洗濯物干し場をよじ登ったり、ぶら下がったりして遊ぶ。

滞留H 教室すぐ近くの路地に数人で腰掛けて遊ぶ。

以上より、児童の近隣における滞留行為に際して、いわゆる児童の遊びのための遊具は使用されておらず、近隣の既存の環境を利用して児童が休憩時間を過ごしており、リヤカーや物干し台などが遊具として活用されていることが明らかになった。また、滞留Eのように、近隣の店主の赤ちゃんを目当てに児童が集まり滞在するように、近隣の「人」も児童の遊びに大きく影響を与えていることが明らかになった。

3-3. 休憩時の児童と店主との交流

店主へのインタビューの結果、店主と児童の交流として以下の3点が上げられた。1つ目が、児童の近隣での事故対応については、過去に目撃された事故として側溝へ

の転落、路地に落ちているトタンに刺さり負傷、通放対応、2点目が物の貸し出し、3点目が商品の販売であった。行っているバイクとの接触が挙げられた。この中で、側溝への転落や、それに伴う負傷に店主が対応したことが明らかになった（図3 ACCIDENT1-3）。

物の貸し出しについては、児童が水道から水を飲む際にコップを提供している店主や、文房具を販売する店主がお金を持たない児童にノートを先に渡し、後日集金するような事例も見られた。

最後に商品の販売はほとんどの店舗で行われており、特に食堂には、昼食時になると多くの子どもが昼食を購入しに押し寄せる。インタビューを行った店主19件中17件が子どもに食べ物、あるいは文房具を販売しているとの証言が得られた。

4. まとめ

本研究より、ノンフォーマルスクールの児童は近隣の路地を遊び場として利用する中で、既存の物干し台やリヤカーを遊具として活用したり、近隣の店主らを目当てに店に滞在するなどの行為が行われていることが明らかになった。また、これら児童の行為に対して近隣店舗を経営する店主の目が届いており、安全確保に一定の役割を果たしていることも明らかになった。

これらは、学校の校庭内での児童の遊びとは異なる特性を有しており、既存の環境を児童の遊び場としてより積極的に活用していく可能性を示していると考えられる。

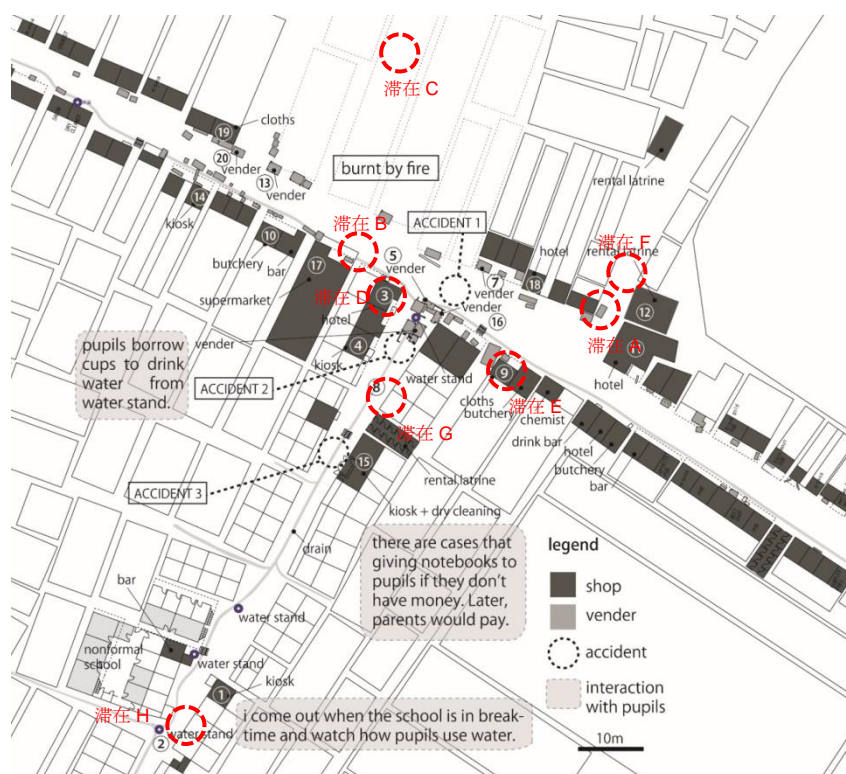


図3 BET 小学校と近隣の店主との関係



写真1. 滞在 A の様子



写真2. 滞在 C の様子



写真3. 滞在 E の様子